



古書店が立ち並び、男性の街のイメージが強い東京・神田神保町で、女性客が増えているという。ここを舞台に若い女性を主人公とした映画「森崎書店の日々」が先月に公開されたことも追い風となっている。実態を探るべく、本紙男性記者が「神保町女子ツアー」に同行した。

## おじさんの街 おしゃれに進化

◀「女子ツアー」では、古本まつりにも行ってみた＝千代田区で

# 神保町 女子 化

さまざまなボストカードが並ぶ「京都便利堂」



菓子屋「文銭堂」。説明川恵子さん。映画「森崎書店」ロケ地を見学する



古本まつり最終日を迎え、古書ファンが押し寄せた三日の神保町で、タウン誌「おさんぼ神保町」編集長の石川恵子さん(33)をガイド役に、「女子ツアー」があった。一行十八人は、靖国通りの古書店街にある「京都便利堂」に入った。美しい絵はがきや便せんなどがずらり。「きれい」「おみやげがいいね」。同店は、四年半前のオープン当初は男性客が多かったが、最近は女性客が増えているという。

靖国通りを渡り、細い路地を歩くと、雑貨店と喫茶店を兼ねた「アミュレット」のレトロ風な白壁が目に入る。アクセサリーなど手作り雑貨が並ぶ一階にはすでに女性客が何人もいた。映画「森崎書店の日々」ロケ地としても使われた同店は、「神保町女子スポーツ」の代表的存在として知られる。「森崎書店」は、傷心の女性が神保町の古書店に住むことになり、本の世界に触れて少しずつ立ち直っていくストーリー。夏から冬までの街の移り変わりが背景になり、ほんのり温かみのある女性好みの仕上がりが。

この日は、映画のロケ地や古本まつり会場など千数カ所をめぐり歩いた。江戸川区の川村麻由美さ

## カフェ、雑貨店…続々

ん(3)は「神保町は「おじさんの街」という印象だったが、おしゃれで女の子が好きな店も多い。また来たいです」。神保町に近い共立女子大に通う吉米地里沙さん(20)は「今までは古本店は入りにくいと思っていたが、結構面白そうなお店があった。これからは一人で入ってみたい」と話した。

「神保町女子」の先駆者といえる石川さんは、十年前から神保町に定着し、タウン誌編集長を務めるなどして街と深くかわつてきた。「客引きやネオンと無縁で、女性が一人で歩きやすい雰囲気の魅力だ」と言う。当初は女性向けの店は少なく「居場所がない」と感じることも少なくなかった。しかし、数年前からアポカド料理専門のレストランや絵本店など、女性が楽しめる店が生まれた。老舗の和菓子や履物の店もある。

五年ほど前に神保町に進出した「アミュレット」オーナーの石坂寧さん(35)は「神保町は女性社会員が多い丸の内近く、大学も多い。地下鉄の便も良く女性客が集

